

紙の楽譜が好き

世界にはさまざまな出版社から発行された楽譜があります。最も歴史が古いドイツのブライトコプフ&ヘルテル、渋いブルーグレーの表紙が特徴のヘンレ、原典版で有名なベレンライター、ショッパ、ペーターズ、フランス物ならデュラン版…、日本では全音楽譜出版社、春秋社、音楽之友社…それぞれが個性を打ち出して出版を続けています。

楽譜は原典版が原点となります

が、学者や研究者、ピアニストら専門家の意見が反映された校訂版などもあります。たとえばショパンの作品ですと、ヘンレ版、パデレフスキー版、コルトー版、ウィーン原典版、最近の出版ではショパン生誕200年の国家事業として全曲出版されたエキエル版など。コルトーのような著名なピアニストが校訂をした版もあれば、原典版を元にショパン研究者エキエルが私見も込めて校訂した版なども

最近演奏家が新曲を演奏することがほぼ常識となつていますが、かつては作曲家自身が演奏するのが通例でした。コンチエルトの時には、作曲家はまずオーケストラパートを完成させて、ピアノパートが間に合わない時などは、作曲家本人だけ理解できる、まるで暗号のような譜面できりあえず演奏するということもあったようです。かなり即興性に富んだ作品が多かったはずなので、楽譜の書き

直しや変更についても、どこまで推測して手を入れて譜面にするか、そういう研究や作業が大切なわけですね。そんな楽譜の奥のことを考え出すと、あれもこれも見てみたくなつて新しい楽譜を見つけてはつい買い求め、1つの作品でも7、8種類の出版譜が集まつてしまいます。

最近ではiPadなどデジタル楽譜を使う人が増えました。でも私は圧倒的な紙派。楽譜を開いた時の香り、紙の色合い、手触り、ページをめくったときに感じる何とも言えない五感のあたたかさ。同時に冊子になつてゐること自体の存在感。本でいうなら、大体3分の1読み進めたとか、あと残り何ページになった…などのような手応えが紙の楽譜にはあります。

文章が段組みによつて説得力が変わるように、楽譜も段初めの小節がどこから始まるかなどでフレーズの印象が変わります。だから私は、この曲ならこの楽譜という自分なりのお気に入り楽譜を決めています。楽譜には校訂者の思いや魂が込められているのです。紙文化は永遠の産物。どんなにデジタル楽譜が発達しようとも、紙の楽譜が最高です。

©Hideki Otsuka

小山実稚恵 — 139 ピアノと私

公演情報

響きの森クラシック・シリーズVol.85

11月29日(土) 15:00

文京シビックホール大ホール

指揮：小林研一郎

東京フィルハーモニー交響楽団

ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第5番《皇帝》

問い合わせ：シビックチケット ☎03-5803-1111

KOYAMA MICHIE 東京藝大卒、同大学院修了。1982年チャイコフスキー国際コンクール第3位。85年ショパン国際ピアノコンクール第4位。「12年間・24回リサイタルシリーズ」(2006～17年)や「ベートーヴェン、そして…」(19～21年)は、その演奏と企画性で高い評価を受けた。2022年より、サントリーホールにおける新シリーズ企画「Concerto〈以心伝心〉」がスタート。オーケストラや指揮者からの信頼も厚い。ショパン、チャイコフスキーの2大コンクールなどの審査員も務める。17年度紫綬褒章を受章。仙台での「こどもの夢ひろば」のゼネラル・プロデューサーを務める。